

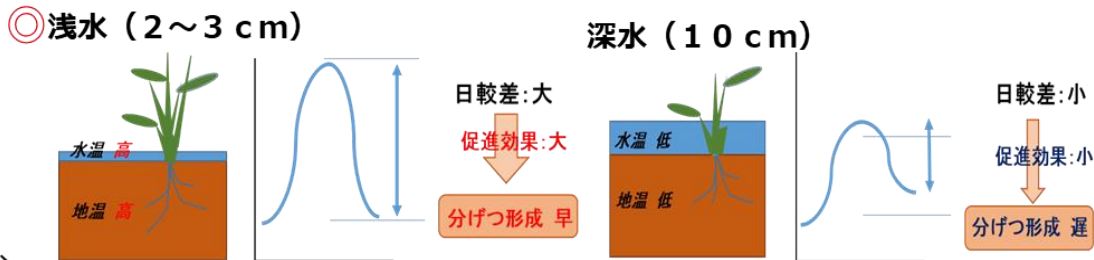
5月田植えと1株3～4本植えて良質茎を!!

【田植え・初期管理のポイント】

※コシヒカリの田植えは5月に入ってから！風の強い日は植傷みするので田植えは行わない！

- ① 植え付け株数・・・60株/坪（高地力田・倒伏田では50株/坪）
- ② 植え付け本数・・・3～4本/1株（1～2本植えても補植はしない）
- ③ 植え付け深さ・・・2cm程度（深植えは十分な分けつが確保できません）
- ④ 田植え後はすみやかに入水!! 活着までは5～10cm程度の深水管理で植傷みを防ぐ
- ⑤ 活着したら2～3cmの浅水管理（低温・強風時は深水）で、地温を上げ、稲を元気にしよう。
- ⑥ 水を入れるのは早朝か夕方。昼間は水温と地温の上昇に努めましょう。
- ⑦ 5月中下旬の温暖な日に水を落とし、軽い田干し（ガス抜き）を2～3回繰り返しましょう。

Point！ 分けつ発生を促進するには、日較差をつくること！
浅水管理の実施により、昼夜の地温、水温の温度差が大きくなります。



【初・中期害虫、葉いもち等の防除（箱施薬剤）】

※JA育苗センターからの購入苗で、箱施薬剤（ファーストオリゼリディア粒剤）を散布済み苗を購入された方は、箱剤散布は必要ありません!!

薬剤名	使用量	使用時期	対象病害虫
Dr.オリゼリディア粒剤	50g/箱	移植3日前～ 移植当日	イネミズゾウムシ・イネドコロイムシ・ウンカ類・ツマグロコバイ・ニカメイチュウ・イネヒメハモグリバエ・イネカラバエ・フタオビコヤガ・イナゴ類・いもち病
ブイゲットフェルテラ粒剤	50g/箱	緑化期～ 移植当日	イネミズゾウムシ・イネドコロイムシ・フタオビコヤガ・ツマグロコバイ・ニカメイチュウ いもち病・白葉枯病

- ※ 水稻ハウスで野菜を栽培する場合は、ハウス内での散布は避けて、田植え前に圃場周辺で散布しましょう。
- ※ 散布量が少ないと十分な効果が得られないので、規定の散布量を守りましょう。
- ※ 箱施薬剤が葉や茎に付着していると、薬害を起こす場合があるので、散布後は軽く払い落してから散水し、薬剤を床土におちつかせましょう。

農作業時は安全に配慮し、事故のないよう十分気をつけましょう！

生産履歴とGAPを的確に記録しましょう！

浅水で代かきし、田植え前に濁り水を排水しないようにしましょう！

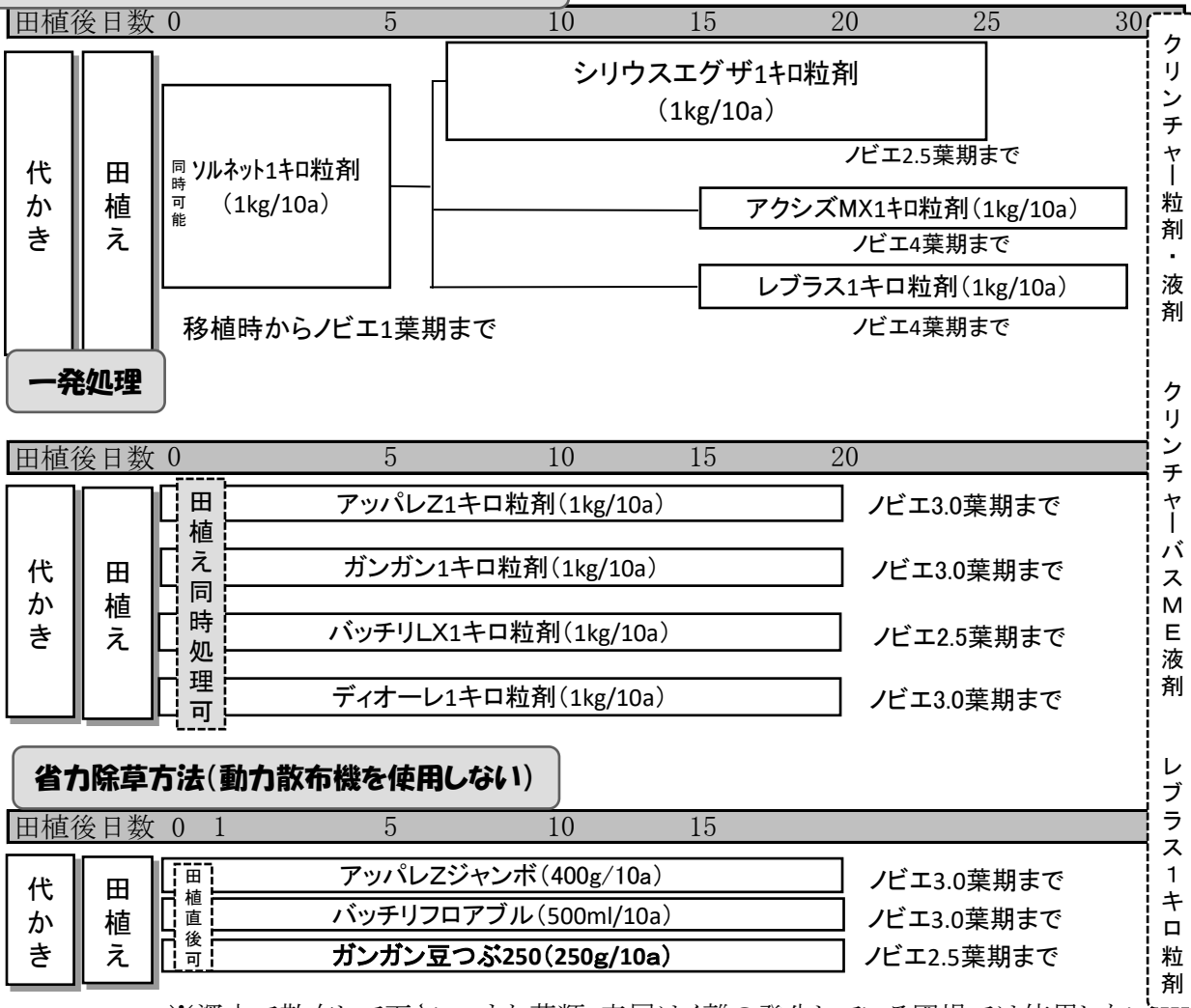
機械作業時は過信せず、安全確認を十分に！

倉庫でのネズミ防除のポイントは清掃の徹底！（駆除剤は絶対に使用しない）

【除草剤の使用時期】

※除草剤散布後7日間は湛水状態を保ち、落水・かけ流しはしない!!

一般的な体系処理(昨年雑草が目立ったほ場) ※下記の表は散布適期です。(登録内容ではありません)



省力除草方法(動力散布機を使用しない)

※深水で散布して下さい。また藻類・表層はく離の発生している圃場では使用しない。

【田植同時散布の注意点】

- ① 代かきは丁寧に行い、田面をできるだけ均平にする。
- ② 水深はひたひたの状態^①で田植えする。
- ③ 補植は行わない。
- ④ 風の強い日は田植えを控える。(薬害の恐れあり)
- ⑤ 薬剤散布後は効果を高めるため、すみやかに入水する。

【除草剤使用上の留意点】

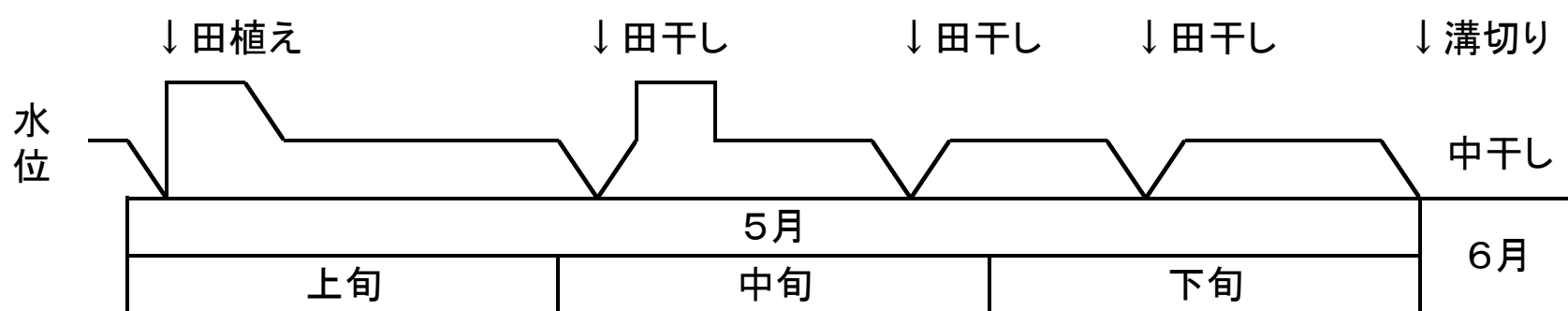
- ① 田植え前の初期剤散布はしないで下さい。根から薬害が起きる可能性があります。
- ② 藻類・表層はく離の発生前に散布する。
- ③ フロアブル剤・ジャンボ剤は、水深5cm以上を保ち・藻類の発生前に手散布する。
(幅30m以下のほ場では畦畔からのみの散布で全体に拡散します。)
- ④ マメットSM1キロ粒剤を使用する場合は、夕方に散布を行う。
- ⑤ 前年と異なる品種を作付けするほ場では、漏生^②対策として初期剤(ソルネット1キロ粒剤・かねつぐ粒剤)を散布する。

適切な初期管理は良質米への第一歩！！

【田植え後の水管理】

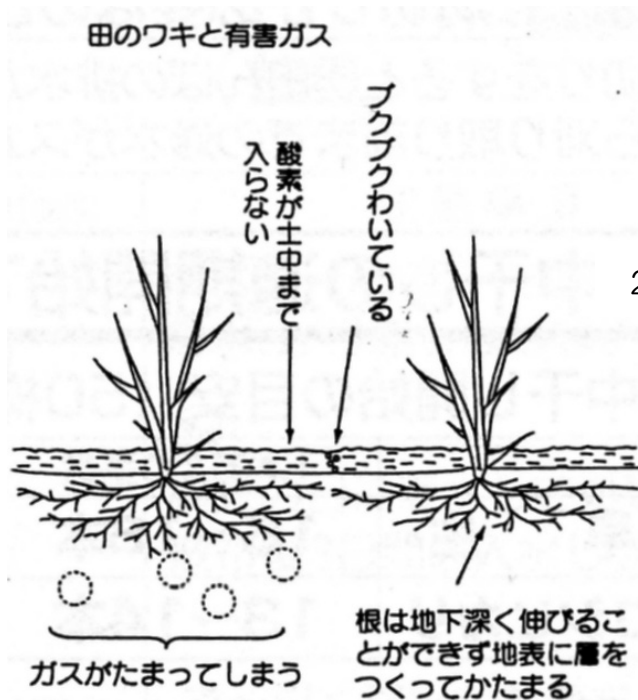
適切な管理により、初期生育の確保・健全な稲体の育成に努めましょう！

- 田植え後3～5日 深水管理(5～10cm程度)で苗を保護
- 除草剤散布時は十分に水を入れる
- 日中は浅水管理(2～3cm)で、地温の上昇を図る

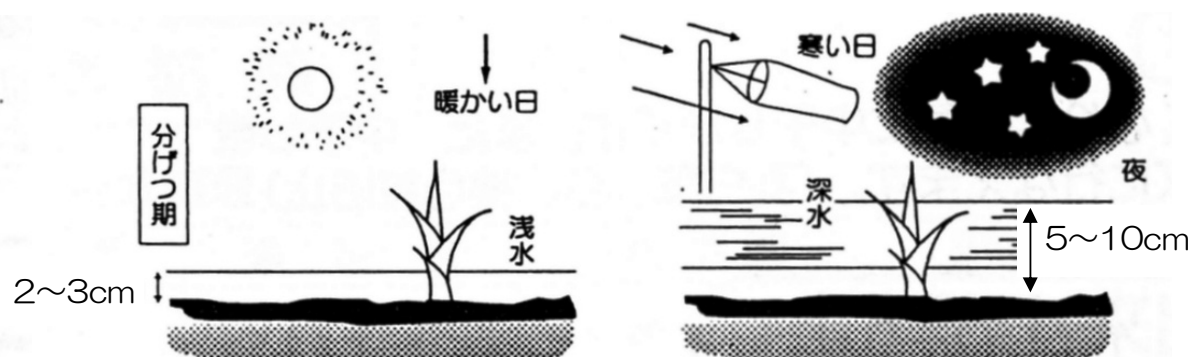


- ① 活着後は日中2～3cmの浅水管理を行い、朝に短時間の入水を励行し、田の水温・地温が上がるように努める。
- ② 中干しまでに田干しを2～3回行い、ガス抜きをし、根の張りを良くする。
※ 田植え後、低温が続く場合でも、出来るだけ暖かい日を選び、水の入れ替えを行う。
- ③ 6月初めには、「中干し」や「間断通水」をしやすくするため、溝切りを必ず実施する。

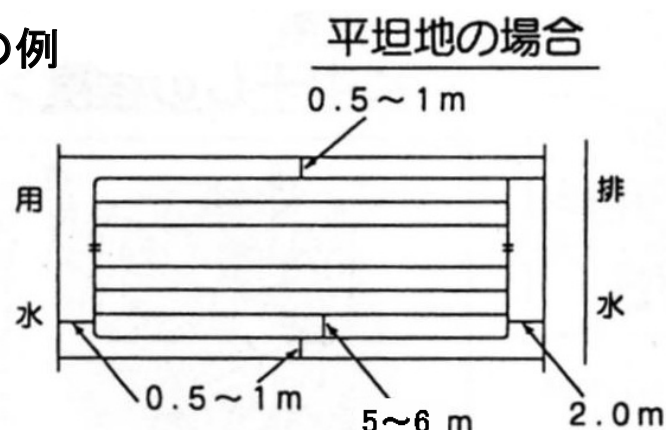
ガスの発生



天候に応じた水管理の実施



溝切りの例



※ガス抜きについて

- 有機物を施用した圃場や湿田では5月中旬以降、地温の上昇にともない有機物の分解が進み、ガスが発生しやすくなり、根腐れの原因となります。ガスが発生している圃場では、晴天時に田干しを実施し、ガス抜きをする必要があります。
- 特に、除草剤(特に中期剤)の散布前には必ずガス抜きを実施してください。

中干しは、田植え一ヶ月後を目安に開始しましょう！

くわしいことは、営農指導員にお尋ねください。

補植苗の放置は葉いもちの発生源となりますので、早急に処分しましょう！